

## 第6学年国語科学習指導案

日 時 平成26年11月7日(金) 公開授業I  
対 象 6年3組 男20人 女18人 計38人  
指導者 林田 健志

1 単元名 宮沢賢治の作品の魅力を伝えよう 「やまなし」 資料「イーハトーヴの夢」

2 単元の目標

### 第5学年及び第6学年目標

目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

- (1) 場面についての描写をとらえ、作品の中で使われている表現を味わいながら、特徴的な叙述について自分の考えをまとめることができる。
- (2) 宮沢賢治の他作品を読み、考えたことを「本のショーウィンドウ」にまとめ、友達と交流し合うことができる。

3 単元の評価規準

観点	B:おおむね満足できる
国語への 関心・意欲・態度	自分が推薦しようとする本を進んで読み、本の魅力を伝えようとしている。
読む能力	目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。(イ) 作者の特徴的な叙述に着目して作品を読み、それらについて自分の考えを、「本のショーウィンドウ」にまとめている。(エ)
言語についての 知識・理解・技能	「オノマトペ」や「比喩」等の作者の特徴的な叙述や語感の違いに気付き、文や文章を読んでいる。(イ(カ))

4 単元について

(1) 児童について

児童はこれまで、文学的文章において、行動や会話、情景などから登場人物の心情の変化に着目する読みの学習を行った。「カレーライス」では、主人公の「ひろし」の心情の揺れ動きについて父や母の会話や行動にも着目し、心情が分かる文を書き出したり、心情曲線で表したりした。そして、場面ごとの主人公の気持ちの変容をなりきり日記にまとめた。初めは戸惑っていた子どもも多かったが、徐々に登場人物の行動や会話、暗示的に表現された言葉から想像をふくらませて作品を読むことができるようになってきた。

そこで、本教材では、作者の特徴的な叙述に着目して作品を読むことで、児童が自分で優れた叙述に気付き、同じ作者の作品を比べて読む力を身に付け、日常生活の読書にも生かせるようにしたいと考える。

(2) 教材について

本単元は、宮沢賢治の「やまなし」と賢治の伝記「イーハトーヴの夢」によって構成されている。

「やまなし」は、比喩表現やオノマトペ・色彩語など宮沢賢治の独特な表現が駆使された象徴的・幻想的な作品である。対比的に描かれている2枚の幻灯の世界は美し

く、児童のイメージを豊かに膨らませ、作品の世界に浸るのにふさわしい教材である。また、〈資料〉「イーハトーヴの夢」は、農学校の教師や作家、農業改良の普及をしながら生涯を過ごした宮沢賢治の生き方や考え方に触れることができる資料となっている。「やまなし」から感じ取ったことと、「イーハトーヴの夢」で紹介されている作者の思いや考え方を重ね合わせることで、児童自身の行動や考え方を客観的に見つけることができると思う。

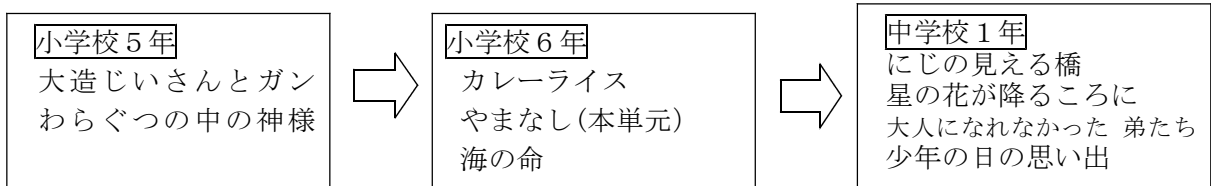
### (3) 指導について

第一次では、まず「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方や考え方に触れる。そして、どのような「本のショーウィンドウ」を作るのかモデルを提示し、イメージをもたせ、単元の学習の見通しをもたせる。

第二次では、「オノマトペ」や「比喩」等の作者の特徴的な叙述に着目しながら作品を読み、「五月」と「十二月」のそれぞれの場面の情景を読み取らせる。また、「五月」と「十二月」の場面を対比しながら、それぞれの場面や題名の「やまなし」に込められた作者の思いについて考えをまとめ、グループで交流する。二次で「やまなし」を読み進めながら、全体で「やまなし」版「本のショーウィンドウ」を完成させていく。

第三次では、宮沢賢治の作品の魅力を伝えようという目的意識・相手意識をもたせて「本のショーウィンドウ」を作り、児童が自分で優れた叙述に気付き、同じ作者の作品を読み比べて読む力を身に付けさせたい。

## 5 単元の系統と他教科との関連



## 6 単元の指導計画（8時間扱い）

- (1) 学習計画を立て、単元の見通しをもつ。 2時間
- (2) 「やまなし」を読み、優れた叙述や表現の工夫、特徴に着目しながら「五月」と「十二月」の谷川の様子をとらえ、「やまなし」版「本のショーウィンドウ」を作る。 4時間(本時 3/4)
- (3) 並行読書してきた賢治作品の「本のショーウィンドウ」を作り、友達と交流する。 2時間

## 7 本時について

### (1) 目標

「五月」と「十二月」を対比し、それぞれの場面で伝えなかった作者の思いを考える。  
＜読む能力＞

- (2) 「自分の考えをもつ 」「互いの考えを交流する 」「互いの考えのよさに気づく 」場面

本時の「自分の考えをもつ」場面は、「五月」と「十二月」のそれぞれの場面の違いや作者の思いを考える場面である。「互いの考えを交流する」場面は、個々にもった考えをグループや全体で交流する場面である。また、その交流で「互いの考えのよさに気づく」ようにさせたい。

(3) 展開

段階	学 習 活 動	場面	○指導上の留意点●評価の観点(方法)
導 入 5 分	<p>1 本時の学習課題を把握する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「五月」と「十二月」の場面を比べ、それぞれの場面で伝えたかった作者の思いを考えよう。</p> </div> <p>2 課題解決の見通しをもつ。</p>		<p>○指導上の留意点●評価の観点(方法)</p> <p>○前時までの学習を振り返り、課題を把握する。</p> <p>○学習の流れを示した紙を掲示する</p>
展 開  3 5 分	<p>3 課題を解決する。</p> <p>(1)「五月」と「十二月」の場面对比する。</p> <p>① 「五月」と「十二月」の場면을視点ごとに表に整理する。</p> <p>② 共通点と相違点を見つける。</p> <p>③ 「五月」と「十二月」ではどちらが明るい世界か考え、話し合う。</p> <p>個人→グループ→全体</p> <p>(2)「五月」と「十二月」のそれぞれの場面で作者が伝えたかったことを考え、まとめる。</p> <p>個人→全体</p>	<p>自</p> <p>交</p> <p>気</p> <p>自</p> <p>交</p> <p>気</p>	<p>○「五月」と「十二月」の場면을視点ごとに全体で確認しながら黒板の表にまとめていく。</p> <p>○全体で共通点と相違点を確認する。</p> <p>○見た目の明るさだけでなく、気持ちにも目が行くように、それぞれの月で起こった出来事やかに言葉や様子に目を向けさせる。</p> <p>○自分の考えをもたせるために、根拠となる文に線を引かせたり書き出させたりする。</p> <p>○考えた根拠となる叙述をもとに話し合わせ、友達との根拠の違いや感じ取り方の違いについて気付かせたい。</p> <p>○個々の考えをグループや全体で交流し合いながら読みを深め、友達の考えの良さに気付かせたい。</p> <p>●「五月」と「十二月」を対比し、それぞれに描かれた世界をとらえている。(ノート・発言)</p> <p>○考えをまとめる形式を示し、記入しやすくする。</p>
終 末 5 分	<p>4 本時の学習を振り返る。</p> <p>5 次時の学習を確認する。</p>		<p>○本時の読みについて振り返り、次時の学習を確認する。</p>

(4) 板書計画

上から来た物の様子 色 水の様子 かにの様子 視点				五月
				十二月

やまなし  
 「五月」と「十二月」の場面を比べ、それぞ  
 れの場面で伝えたかった作者の思いを考えよ  
 う。

まとめ（賢治が伝えたかったこと）  
 五月（ ）な世界  
 理由・・・  
 十二月（ ）な世界  
 理由・・・